

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 7 月 9 日現在

機関番号：41304

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26381110

研究課題名(和文) 小学校における「言葉の力」へと連続する保小連携カリキュラムの開発と実践

研究課題名(英文) Investigation of developing curriculum and early childhood education which is continuous with children's verbal skill for elementary school education

研究代表者

飯島 典子 (IIJIMA, NORIKO)

聖和学園短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：40581351

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は小学校への「言葉の力」へと連続する幼保小連携カリキュラムの編成と効果的な実践方法の検討を目的として研究を進めてきた。本研究の成果として、(1)幼保小連携カリキュラムの編成とカリキュラムマネジメントへの活用、(2)保育評価の開発が挙げられる。また、これらの成果を踏まえ幼児の学びに向かう力の育成に関する課題を明らかにした。

これらの成果は学会で発表するとともに論文にまとめた。さらに、実践した保育内容は保育者向けの書籍や保育者対象の研修会にも活かされ、保育実践に寄与した。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study was to explore developing curriculum and early childhood education which is continuous with children's verbal skill for elementary school education. This study found out (1) developing curriculum of early childhood education and apply curriculum management and (2) developing assessment scale for contents of education. Addition, this study revealed to issue which develop children's learning attitude.

These findings were applied to describe on specialist books and contributed to early childhood education at preschool.

研究分野：教育学

キーワード：幼保小連携カリキュラム 幼児教育・保育 遊び 保育者の専門性

1. 研究開始当初の背景

近年、幼児教育と小学校における初等教育の連携推進が課題とされ、日本と諸外国の幼児教育の比較検討がなされている。その背景には日本は幼稚園（教育）と保育所（福祉）とが並立しているが、諸外国は教育（幼稚園やプレ・スクール）と福祉（保育所）を分け幼児教育から初等教育への連続性を形成するシステムが構築されている点にある。平成20年度に幼稚園教育要領、保育所保育指針の改定（改訂）により幼稚園と保育所の教育内容は整合化され、幼稚園や保育所等で行われる幼児教育は初等教育の先取りではなく、義務教育及びその後の教育の基礎を培うものであることが明記された。さらに幼児の自発的な活動としての遊びを重要な学習として位置づけ、カリキュラム（教育課程・保育課程）を編成し意図的・計画的な指導を行うよう推進している。実際に、数量の理解などはそれを直接的な目的とした指導は少なく、集団活動の全般にわたって行われている（榊原,2002）。しかしながら、保育者が遊びに埋め込められた学習経験を理解し、遊びや活動を発達の視点から計画的に行うことには繋がっていない（奥山・山名,2006）。その理由の1つとして遊びには様々な要素を取り入れられる一方で、小学校における学習の見通しが立たなければ、幼児教育のねらいが定まらず、それを実践する遊びを計画的に設定することが難しいことが関係していると考えられた。さらに、保育所保育指針では平成20年度の改定において保育課程が義務化されたためカリキュラムの開発段階にあり、保小連携カリキュラムの開発は喫緊の課題といえる。

2. 研究の目的

文部科学省平成24年度幼児教育実態調査では幼稚園において小学校での学習を見通した幼児教育の編成と実践はほとんどなされていなかった。その背景には幼児教育は遊びや生活を通じて行われるため、小学校での学習を見通す焦点が分かりにくいことにあると考えられた。そこで、本研究では小学校学習指導要領の「言葉の力」に着目し、1年生における「言葉の力」を整理するとともに、それを目指した保育における発達と学びの長期的目標を明確にし、「言葉で話す、伝える、考える」といったテーマのある協同的活動を通じた保小連携カリキュラムを編成、実践することを目的としていた。

3. 研究の方法

(1) 保小連携カリキュラムの編成と実践

①小学校学習指導要領に示された学習内容および教科を横断する「言葉の力」に関す

る事項、②小学校で実践している言語活動の実際と内容、③幼保小連携カリキュラムの編成事例に関する文献検討、小学校教諭へのヒアリング調査を行い保小連携カリキュラムの編成を試みた。また、④編成されたカリキュラムをもとに「言葉の力」に連続する協同的活動を認定こども園の年間指導計画に取り入れ実践するとともに、⑤保育者養成校において保育計画と実践を行った。

(2) 協同的活動の効果検討

①小学校1年生と5歳児クラス担任に対する児童（幼児）の学びの育ちに関する質問紙調査を行った。②その結果から協同的活動の教育評価指標を抽出し、協同的活動に対する幼児の自己評価を求め教育効果の検討を行った。

4. 研究成果

(1) 保小連携カリキュラムの編成の意義

①カリキュラムマネジメントの確立

小学校学習指導要領低学年の国語科、算数科、生活科のねらいを整理し、5歳児の発達過程に合わせて保小連携カリキュラムを編成した。編成にあたっては国語科、算数科、生活科それぞれの科目との系統的連続性を捉えるため科目のねらいごとに発達の変化と深化の観点から編成した。これをもとに、認定こども園において年間指導計画に「言葉の力」に繋がる協同的活動として年間テーマ（「話し合い活動」「お話づくり活動」など）を決め計画的、継続的に実践した。カリキュラムをもとに実践を行うと、保育者の保育に対する見方、考え方に変化が生じ、保育のPDCAサイクルを行えるようになった。

編成したカリキュラムは発達観点の柱ごとに発達の過程が示されていることから、保育者はカリキュラムに示されている育ちの内容をもとに幼児の育ちの実際を確認するといった学びの発達アセスメントを行うようになった。このアセスメント結果をもとに計画していた保育内容について必要な変更や援助方針を検討し実践しなおすことが可能となった。また、保育内容を構想する際のチェックリストとして活用することで、保育計画の可視化が可能となった。保育は教科学習とは異なり「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域に示されたねらいと内容を総合的に展開する。そのためどの領域に関する力を育てているのかが曖昧になる場合もある。編成した保小連携カリキュラムに示された事項は発達の領域ごとにまとめられているため、これらの事項を目標としているかどうか保育活動や環境構成をチェックし特定の事項に偏っている場合には見直すことが可能となった。このように発達の観

点から教科との系統的連続性を踏まえた幼保小連携カリキュラムを編成し保育実践を行うことで保育のP D C Aサイクルを行いやすくなり、保育者のカリキュラムマネジメントを可能にすることが分かった。

しかし、平成 29 年に保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園保育・教育要領および学習指導要領が改定（改訂）された。保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園保育・教育要領には幼児期のおわりまでに育て欲しい 10 の姿が明記されている。ここで示されている育ちの観点から踏まえた編成の見直しが求められている。

②保育者養成への応用

教育課程（カリキュラム）に基づいて保育を計画し、実行した保育内容の実際および幼児の反応から保育を評価改善する P D C A サイクルは新学習指導要領においてカリキュラムマネジメントの確立の観点から重視されている。実践力のある保育者養成を目指す上で保育者養成の段階からカリキュラムマネジメントの理解と実行に関わる学びを修得できるようにする必要がある。また、その学びは理論的理解だけでなく実践によって養成学生が主体的で深い学びを得られるよう工夫することが求められる。そこで、発達の観点によって構成された一般的な幼保小連携カリキュラムを活用することで、養成段階であってもカリキュラムに基づいた保育計画を実践的に学習しカリキュラムマネジメントについて考察することが可能になる。養成時における保育技術の学習では生活と発達の連続性を踏まえて計画することが難しく、単発的な保育内容を構想する傾向にある。そこで、本研究で開発した幼保小連携カリキュラムを用い、養成学生が構想した保育を幼保小連携カリキュラムのどの時点で実施するのか、その前後の発達の連続性をどのように捉えるのかといった観点から考察することができた。また、小学校 1 年生に理科科目が設置されていた時代の教科書を持ちいて系統的連続性を踏まえた保育内容を考案するよう課題を提示すると、学びの基礎を捉え、幼児期の教育に相応しい遊びによって幼児の「見方・考えた」を獲得できるような保育を計画できるようになった。

ここから、各園が独自に編成する教育課程の基礎となる一般的な発達過程によって編成された幼保小連携カリキュラムによって養成段階から就学前教育の実践力を向上させることができると考えられた。

(2) 保育評価

①クリッカーによる評価手法の開発

幼児が体験した活動に対する活動評価（「友だちと協力してできたか」「楽しかったか」「またやりたいと思うか」など）と、学びの状態に対する自己評価（「ひらがな読める」「曜日が分かる」など）はクリッカーを用いることで測定可能となった。活動ごとに活動評価を行うと時期的な変化はみられず、活動の特徴によって評価が変動することから、幼児はそのときの活動について正しく評価することができていると思われる。すなわち、活動を成立させるために必要な発達から「できた」「楽しい」といったことを評価できると考えられた。これまで、幼児期の学習評価、教育評価の測定は保育者などによる客観的评价や、幼児の聞き取りから得た発話を分析データとすることが多かった。しかしクリッカーを使用することで共通した指標を用いた幼児の主観的評価データを収集することが可能になることが分かった。

②自己評価を活用した幼児理解

学びに対する子どもの自己評価と保育者評価との間にズレが生じ過剰評価をしている子ども（高評価群）と、ズレが生じず適切に評価している子ども（適切評価群）とでは活動評価が異なっていた。すなわち、高評価群の子どもは適切評価の子どもよりも活動評価得点が高く「活動は楽しい」「またやりたい」と感じる傾向にあった（図 1）。

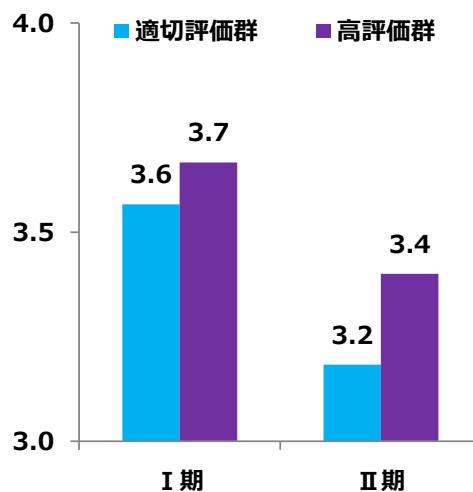


図 1 I 期、II 期における適切評価群と高評価群の活動評価得点の平均

実際の録画記録からは高評価群は活動の意図理解が不十分であり、適切評価群は活動意図を理解できているが自身の力を十分に発揮できてない傾向にあった。子どもが自己の遂行を実際の能力よりも高く評価する傾向は Schneider (1998) などにもみられる。こ

れは幼児の楽観性とも関係している。子どもは今の自分自身や自分の将来を非常にポジティブに捉える楽観性があり、これが生きるエネルギーとなって「できない」経験があったとしても有能感は低下しない（中澤・泉井・本田, 2009）。楽観性は幼児が困難さに直面したときに、それを乗り越えようとするエネルギーとなり、自分の能力を実際よりも高く評価するからこそ子どもはさまざまなことに挑戦でき、失敗を失敗として捉えないからこそ繰り返し取り組むことができる。小学校への移行はこれまでの学習スタイルや環境とは質的に異なる困難さがあるため、これを乗り越えるには「できる」と信じる楽観性が必要である。高評価群の子どもにとって楽観性によって自信を失わずにいられることは支援をすすめる上で重要である。むしろこのような特徴を生かし就学前支援を丁寧に行う必要がある。また、適切評価群の評価が低くなることも重視しなければいけない。活動の実行力に差が生じるとできる子どもほど十分に力を発揮できず満足感や達成感を得ることが難しくなることも考えられる。したがって保育場面では子どもが活動を楽しんでいるか、活動の意図を理解し遂行できているかどうかといった観点から就学前に必要な力の発達援助を行うことが小1ギャップを乗り越える重要な対応となる。

(3) 学びに向かう力の育成に関する課題

①児童と幼児の差

5歳児クラス担任に対し5歳児終わりの学習準備実態調査を行うと、「ひらがなが全て読める」「簡単な計算ができる」「曜日がわかる」といった知識の獲得に関する項目は評価が高く、小学校の学習に必要な基礎を獲得して就学していることが分かった。したがって、小学校就学に求められる幼児期の学習は単なる知識獲得ではなく、学びに向かう力だといえる。

たとえば、国語科であれば「ひらがなを書ける」ことを教科の先取りで行うのではなく、言葉を使う力として「話す・聞く・伝える・考える」力を養うことが重要だといえる。とりわけ「言葉で考える」ことは多様な認識の発達と関係している。たとえば、感情は言葉によって理解し制御する機能がある。小学校1年生担任と5歳児クラス担任に対し児童（幼児）の学びの実態調査を行うと、「やりたいことができないと我慢できない」「分からないことでも、すぐにあきらめずにいろいろと考える」といった感情コントロールの育ちが重要であることが分かった。また、「新しいことを知るのを楽しんでいる」「分からないことについて、「なぜ、どうして」など、まわりに質問ができる」といった意欲に関する

事項は、5歳児クラス担任評価の方が小学校1年生担任評価よりも高い傾向にあった。これは、幼児期と児童期で求める意欲の質や高さが異なることが関係していると思われる。幼児期の教育では児童期で求められる事項を踏まえた育ちを目指す必要がある。

②5歳児男女差

5歳児の学びに向かう力について男女の特徴を比較すると、男児は<知的的好奇心・意欲><アサーション>の得点が<活動態度>の得点よりも高い。これに対し女児は<自己調整>の得点が<活動態度><知的的好奇心・意欲><アサーション>の因子得点よりも高い（図2）。ここから、男児と女児では学びに向かう力のバランスに違いがあると考えられた。また、とりわけ男児は女児に比べ情動調整の弱さがある。また、項目ごとに見ると「自分の名前をひらがなで書ける」といった知識は女児の方が高いが、「工夫して遊ぶ」「おもしろそうだったことは、積極的に調べようとする」といった学びに対する意欲は男児の方が高い傾向にあることが分かった。これらのことから、幼児教育では男女差といった個々の特徴を踏まえて、それぞれの子どもの得意、不得意に応じた発達課題を見出しスムーズな就学移行を進めていくことが求められる。

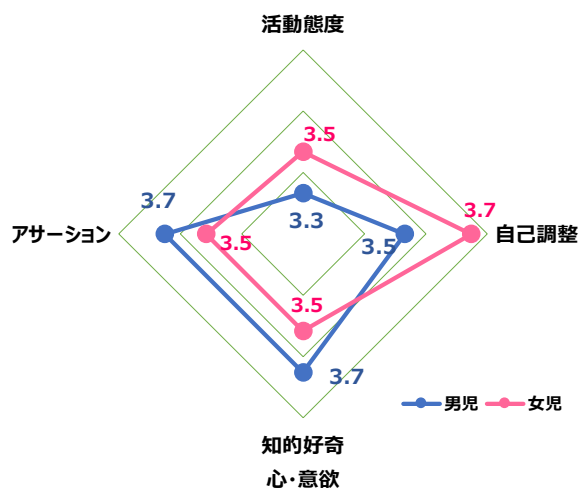


図2 学びに向かう力の男女別因子得点

③気になる幼児への支援

気になる幼児は情動調整や行動調整に困難さをもつため、集団活動に最後まで参加できないなど失敗を経験することが多い。また、失敗経験は自己評価を低くすることに繋がることから就学前課題への対応が求められる。気になる幼児と気にならない幼児の学びに向かう力を比較すると、気になる幼児は<活動態度><自己調整><アサーション>

が気にならない幼児よりも低い傾向がある（図3）。しかし、＜知的好奇心・意欲＞に差が生じないことから、気になる幼児が楽しめる活動を通じてスムーズな就学移行を援助していくことが課題となる。

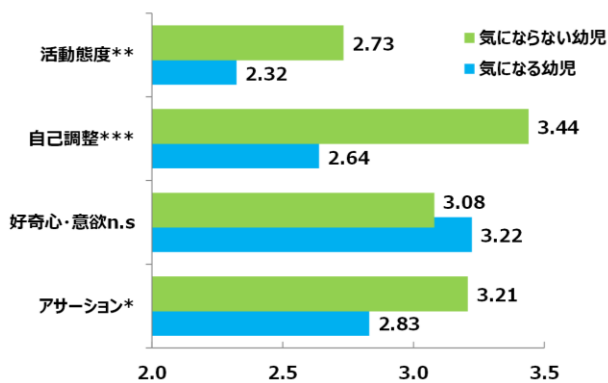


図3 気になる幼児と気にならない幼児の学びに向かう力の因子得点

＜引用文献＞

- ① 榊原 知美、保育活動における幼児の数量学習：幼稚園教師からの支援を通じて、保育学研究、Vol. 54、2002、227-236
- ② 奥山 順子、山名 裕子、幼稚園教育における計画の位置づけ：保育者の意識調査にみる保育の計画性と保育者の専門性、秋田大学教育文化学部研究紀要、Vol. 61、2006、83-90
- ③ Schneider. W. Performance prediction in young children: Effects of skill, metacognition and wishful thinking. Developmental Science, Vol. 1, 1998, 291-267
- ④ 中澤 潤、泉井 みずき、本田 陽子、幼児の有能感の認知と遂行との関連：幼児の楽観性の視点から、千葉大学教育学部研究紀要、Vol. 57、2009、137-143

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 飯島 典子、幼保小接続カリキュラム開発の試み：自己制御学習とメタ認知に着目して、聖和学園短期大学紀要、査読有、Vol. 53、2016、pp. 31-40
- ② 飯島 典子、山本信、中島 恵、幼児のお話づくりにおける感情の因果的理解と向社会的行動の発達：保育実践による有用性の検討、聖和学園短期大学紀要、査読有、Vol. 55、2018、pp. 119-125

〔学会発表〕（計3件）

- ① 飯島 典子、幼児の言語活動に対する活動評価と学びの自己評価との関連、日本

発達心理学会、2016

- ② 飯島 典子、気になる幼児の就学前教育の課題、日本保育学会、2017
- ③ 飯島 典子・小泉 嘉子、幼児・児童の持続可能な学習の現状と課題1：幼児の学びに向かう力の育成、日本心理学会、2017

〔図書〕（計2件）

- ① 飯島 典子 他、株式会社みらい、つながる保育原理、2018、192 (pp. 52-63)
- ② 飯島 典子 他、北大路書房、「気になる」子どもの社会性発達の理解と支援：チェックリストを活用した保育の支援計画の立案 2018、96 (pp. 52-63)

〔その他〕（計2件）

- ① 飯島 典子、中島 恵、小学校の学びへと連続する科学遊びの保育実践、保育指導法実践研究報告書、Vol. 2、2017、pp. 7-21
- ② 飯島 典子、中島 恵、上村 裕樹、絵本を題材にした遊びの保育実践：小学校への接続を意識したカリキュラム、保育指導法実践研究報告書、Vol. 3、2018、pp. 7-22

6. 研究組織

(1) 研究代表者

飯島 典子 (IIJIMA, Noriko)
 聖和学園短期大学・准教授
 研究者番号：40581351

(2) 研究分担者

小泉 嘉子 (KOIZUMI, Yoshiko)
 尚綱学院大学・准教授
 研究者番号：80447119

(3) 研究協力者

中島 恵 (NAKAJIMA, Megumi)
 高橋 祐子 (TAKAHASHI, Yuko)